

## キリスト教文化はわが国において可能か？

阿 部 包\*

### 0. はじめに

数年前から、わたしは Enculturation<sup>1</sup>の問題を考えながら、わが国においてキリスト教文化は可能か、可能であるとすればそれは如何なる形か、思い巡らしている。その過程の中で、わたしは素朴かつ基本的な様々な問いと対面してきた。

本稿で、わたしは、わが国においてキリスト教文化の存立を可能ならしめる条件があると仮定した上で、それがどのようなものでありうるかを、先の漠然とした思い巡らしを言葉に移し変えながら、探してみたいと思う。

### 1. キリスト教と〈名誉白人〉

キリスト教はなぜ日本の文化の内部で開花できないのか？おそらく、それは異物に留まっているからである。キリスト教は日本人にとっていつまで経っても西洋文化の伝達者にすぎないのではないか。仏教は親鸞や日蓮や道元など、巨星を輩出し続けて独自の日本仏教を形成してきた。その意味では仏教は見事にインカルチュレーションを遂げて、今日揶揄されるように〈葬式仏教〉にまでなりおおせているのである。他方、キリスト教はどうか。

ひところ、日本が西側の一員であるとか、日本人が名誉白人<sup>2</sup>であるとかいう言い方がなされた時期があった。西側というのは、政治体制についての表現とすればあながち的外れとは言えないが、〈名誉白人〉の方はよく考えてみれば極めて不名誉な表現である。しかし、これは日本人の欧米に対する感情とアジアに対する感情の歪みを露呈させ、日本人自身にそれを自覚させるには有効な表現だったかもしれない。

---

\* 藤女子大学人間生活学部人間生活学科 教授

実は、この<名誉白人>という不名誉な用語と日本においてどうしてもインカルチュレーションしえずにいるキリスト教とがわたしの中でオーバーラップしてしまうのである。われわれ日本人が教会という異国趣味の建物の中で加入儀礼としての洗礼を受けるとき、当該の人はヨーロッパという長い伝統に接木される自分という意識を微塵も持たないと自信を持って断言できるであろうか。個人的なことになるが、わたしは四歳の時に受洗している。後年聖書を本格的に学び始めてから、この種の疑問と格闘することになるのだが、当然今もこの格闘は続いている。

わたしが接木された親木は、実際は夥しい顔を持っている。異端審問もあれば魔女狩りもある。反ユダヤ主義もあればその果てのホロコースト＝ショア<sup>5</sup>もある。受洗とともにわたしはこれら膨大な歴史をも必然的に背負い込むのである。わたしはそれらのすべてを飛び越えて、ユダヤ教からキリスト教への分岐点に位置するイエス・キリストとだけ結ばれるわけではない。わたしが接木された親木の顔はこれに留まらない。聖書からわれわれが知りうる限りでも、カナンに侵入して先住民の土地を奪取する顔もあるし、水浴するバテシバを見初めて、彼女を寝取るためにその夫ウリヤを意図的に最前線に送り込んで戦死させるダビデという顔もある。これらのすべてが受洗とともにわたしの歴史となる。洗礼は、わたしの理解では、このような意味をも内包している。ただ水に沈んでそれまでの自分の罪に死んで、罪とは全く無縁な白布のように潔白な新しい自分として立ち上がる、と信じられるほど能天気にはなれないのである<sup>6</sup>。

洗礼があるいは受洗がそのような意味をも内包するとすれば、キリスト者になることは先進文明であるヨーロッパの積極的な成果のみを、洋服を着るように身に纏うことではない。ましてや、<名誉白人>としての歪んだ自意識を持つことではない。

## 2. 日本人がキリスト者であるとは

少しばかり考えれば誰にも明らかなことだが、個人個人の人間を離れて抽象的なキリスト教が存在するわけではない。あくまでもキリスト教というのは、信徒たちの信仰と活動の総体である。

ところで、日本人がキリスト者であるということは一体どのような事態なのであろうか。しばしば言われるようにキリスト教にとって、日本は布教国あるいは宣教の対象国である。つまり文化的土壌は、仏教的・神道的であり、ヨーロッパから見ればアニミズム的なベースが色濃く残っている、ということになろうか。初代教會的な物言いを敢えて試みれば、異教世界である。日本人は外来のものを貪欲に取り込みはするが、取り込まれたものはわれわれ独自の<現世利益>という強固なフィルターを通過していつの間にか日本的なものに変貌する。これによって仏教は見事に日本仏教となっ

た。仏教としての共通性は保持しつつも、チベット仏教とも中国仏教ともタイ仏教とも異なる日本仏教が成立した。

キリスト教にとって、日本は布教国として高い精神性を持ちながらもなかなかキリスト教化し難い国であり続けたのではないか。ただ、キリスト教は発生当時から今日まで変貌に継ぐ変貌の歴史を歩んできた。イエス運動は基本的にユダヤ教の内部改革運動であったし、初期カトリシズムもそのままの姿で今に存続しているわけではない。正教会は古い形を残しつつも、基本的にはそれぞれの民族独自の枠組みを形成して来た。ローマ・カトリックもプロテスタントの勃興の影響下に改革を断行せざるを得なかった。こうして、布教国である日本が出会ったキリスト教は紛れもなくヨーロッパ・キリスト教だったわけである<sup>7</sup>。敢えて若干扇動的に言えば、バスク出身の好戦的なイエズス会師らと出会ったのであった。因みに、フランシスコ・ザビエルが反ユダヤ主義的刻印を色濃く帯びた宣教師であったことはカトリック内部ではあまり語られない。

日本人はヨーロッパ文明の担い手としてのキリスト教に出会ったのである。言いかえれば当時の日本人にとってキリスト教はヨーロッパそのものの顔を持ってやって来た。今日のわが国のキリスト教にまで続く第二の出会いが文明開化と重なるのも、結果的には不幸な事態だったかもしれない。科学技術やら文学やら芸術やら政治制度やら教育制度やらと並んでキリスト教は再度日本に入ってきた。文明開化によるヨーロッパ文明の受容。多くの日本人は、宗旨替えはせずにキリスト教を、ヨーロッパを学び理解するための必修科目であるかのように学ぶことになる。そして、ごく一部の日本人が宗旨替えにまで至るが、その場合多くは彼もしくは彼女自身が持っているヨーロッパの積極的なイメージへの接木でしかないし、当人自身日本への積極的帰属意識も希薄なので、結果は、お世辞にも生産的とは言えない。

ひとこと断わっておくと、これは何も単なる他者批判ではない。同時にかつてのわたしの自画像でもある。日本人がキリスト者であるためには遅かれ早かれこの地点を通らざるを得ないのである。最も生産的な道は過去をそのまま引き受けることであろう。先に述べたキリスト教に歴史的に内包される過去の全容と日本の歴史に内包される過去の全容とを引き受けるのである。何故なら後者の中に生まれたわたしが前者に接木されるのであるから。洗礼とはそれへの招きであり、受洗したということはわたしがそのような道に歩みを進めたということに他ならない。そして、これは試練であると同時にわたしを鼓舞する神の恵みでもある。それを召命と言い換えても的を外したことはない。

思い切って言おう。われわれが出会っているキリスト教はヨーロッパ内インカルチュレーションを遂げた言わば特殊ヨーロッパ的キリスト教である。かつてはそれが普遍として排他的に地域的特殊を排除したり、それらと融合したりしながら世界宣教を展開してきた。われわれ日本人には特殊ヨーロッパ的なものをすべて拭い去ったキリスト教などは想像できないだろう。しかし、ここで敢えてわたしは想像を逞しくした

いと思う。そして、そうする必要も十分あるように思う。キリスト教という宗教のこの世的な姿は、われわれが歴史的に出会ったものだけではない。われわれがかつて偶然出会ったあの特殊ヨーロッパ的なキリスト教は、その出会いが歴史の中で起こった事として既に必然の領域に属するとは言え、絶対的な意味を持つわけではない。

もし、キリスト教から特殊ヨーロッパ的なものを拭い去る作業を遂行した果てにたち現れるキリスト教が魅力ないものであったとしたら、われわれが魅力を感じていたのは過去のヨーロッパであってキリスト教ではないと思った方がいい。その可能性は十分問うに値するだろう。

### 3. 歴史的遺産と現代

わたしは何度も接木という比喩を使った。本来はわざわざそのような比喩を使う必要はないかもしれない。何故なら、人が生まれるという出来事それ自体がそういう意味を必然的に持つからである。進化の系統樹という概念図式を想起するだけでもいい。現在地球上に生活している個々の<わたし>はすべて進化の先端を歩んでいる。いや、<わたし>だけではない。そんな意識さえ持たない生物もそれぞれが進化の先端を歩んでいる<sup>8</sup>。分かりやすく、ことを<わたし>に限って考えよう。<わたし>の身体を構成する細胞の遺伝子は、<わたし>を地球上に生み出すまでの生命誕生以来の記憶装置である。だから、<わたし>の誕生自体がこの生命誕生以来の歴史への接木そのものなのである。こうして、世界は接木に接木を重ねて更新されつづける。

もちろん、<わたし>はヒトという種の一員として生命の歴史へと接木された。同時に<わたし>は多くの特殊が生きられる場である。一例を挙げれば、わたしは家族の一員であり、地域社会の一員であり、小教区の信徒であり、職場組織の一員であり、複数の学会に所属する、等々。そして、これら一つ一つがより大きな広がりを持つものに包摂されている。いつもわたしは空想の中に遊んでいる自分を発見するのだが、人間は数え切れないほど多くの人形から出来ているマトリョーシユカなのだ。

現在は過去なしにはありえないし、将来も過去なしにはありえない。おそらく、日本のキリスト教がインカルチュレーションに失敗してきたのは、過去に対する態度と無縁ではない。自己批判とか内部批判という姿勢がなりを潜めた時、どのような事態が生ずるかはわれわれの歴史自体が明らかに指し示してくれている。例えば、ドイツのキリスト者とホロコーストとの関係に比較されるべきなのは、われわれ日本のキリスト者と南京大虐殺や強制徴用や従軍慰安婦問題との関係であろう。歴史に接木されるというのは、そういう事態にも接木されることを言うのでないとすれば他に何を言うのであろう。

われわれは、この国に住む者として、広島や長崎に学ぶだけではなく、南京大虐殺

を始めとするわれわれ自身の加害者としてのあり方から多くを学ばなければならない。地域史や郷土史を地道に掘り起こす営みが、各地で根気強く行なわれているが、それはしばしば当事者を加害者としての自己の歴史と対面させてくれる。A.ソルジェニーツィン<sup>9</sup>が描いた『収容所群島』の世界はシベリアに限られるわけではない。北海道でもダム建設、鉄道敷設、炭坑開発などに多くの囚人や強制徴用された朝鮮人が酷使され、命を落としていった。

二十世紀末の先進工業諸国に数えられる国々は、おそらく例外なく加害者としての刻印を免れないだろう。もちろん、重要なのは、客観的に加害者であるという事実そのものだけではなく、その事実を直視し背負い込み引き受けることである。ドイツが実践し、日本が蔑ろにしてきたのは正にこのことである。加害者性の自覚こそ、将来に一步を踏み出そうとするわれわれには是非とも必要なのである。これはつまり、接木される側の〈わたし〉の歴史的自覚とでも言うべきことである。歴史的自覚は、しばしば事柄の意味の発見もしくは再発見という様相を呈する。なぜなら、接木のほうがしばしば先行するからである。

例えば、ヘブライ人とカナン人との物語から、わたしは常に現代のイスラエル人とパレスティナアラブ人との関係を、また北アメリカ大陸への移住者と先住民との関係を、さらに北海道の和人とアイヌを始めとする北方少数民族との関係を直ちに連想する。そして、それこそが現代において聖書を読むことなのだ、とさえ思う。もちろん、わたしに歴史的自覚を促すのは何も聖書の物語ばかりではない。小説家による世俗の物語も、歴史家による歴史記述も、そしてしばしば画家や作曲家の様々な仕事もわたしの歴史的自覚を鼓舞してくれる。

現代のみならずいつの時代でもそうだったはずだが、われわれが生きるためには過去に対しても他者に対してもともに〈開かれて〉いなくてはならない。いや、むしろこれはわたしの外から指し示される規範のようなものではなく、わたしの内から溢れ出てわたし自身を鼓舞する声のようなものである。今を十全に生き抜くために、わたしは過去に対しても他者に対しても〈開かれて〉ありたいのである。再度繰り返すが、この過去は加害者としての多くの顔をも持つ日本人の過去であり、同時に〈愛〉の宗教として世界の隅々で戦争を、そして虐殺を延々と繰り返し行ってきたキリスト教の過去でもある。普遍性の主張はしばしば排他性に反転してきた。これは記憶されていいことである。

#### 4. 相対化を受け容れるキリスト教と現代

現代はキリスト教が相対化されている時代である。普遍性を標榜するカトリック<sup>10</sup>も、他宗教と比べて排他的に普遍性を主張し得る時代ではないことを認識しつつある。

かつて排他的に自らの真理性を主張していたキリスト教も長い布教活動の過程の中で、漸く他宗教の相対的真理性に気づきその事態を受け容れると同時に、自己の相対化をも受け容れざるを得なくなった。これは、例えばキリスト教神学内部から生まれた『神は多くの名前をもつ』<sup>11</sup>を始めとするジョン・ヒックの一連の仕事が例証している。比喩的に言えば、個別宗教は、それぞれの宗教が様々な名前と呼んできた神と関わる多様な方法であり、異なった道なのである。あるいは、名づけようもない大文字の神は、常に小文字の神々として顕現する、とでも言えようか。

こうした事態の認識には多くのことが有効に作用したに違いない。若干の例を上げて説明しよう。まず、世俗化の議論<sup>12</sup>である。これは既成宗教集団の退潮とも期を一にしていたが、そもそも宗教の存在形態を既成宗教集団のそれに限って考えれば、当然宗教は衰退傾向にあった。しかし、視点を変えて、宗教の存在形態が変化しつつあると考えれば、衰退傾向にあるのはあくまでも既成宗教集団としてのあり方であって宗教それ自体ではないことになる。

次に、文化人類学の発展とその影響が上げられよう。中でも当初<未開>とか<野蛮>という蔑称が適用されていた世界各地の先住民族に関するフィールドワークから、彼ら先住民の極めて豊かな文化の内実が知られるに及んで、文化人類学的研究それ自体を担っていた欧米の研究者が自らの自民族中心主義(Ethnocentrism)に気づき、ヨーロッパ的文明の相対化への視点を身につけていくことになった<sup>13</sup>。先住民の神話や民話、そしてそれらと緊密に結びついた生活習慣や宗教儀礼などが、彼らの世界や祖霊や神々との豊かな交わりを示していた。研究者は言わば失われた世界との直接的な関係性へと招じ入れられる稀有な体験をした。彼らは生きられた世界の圧倒的な力動感に包まれたはずである。言ってよければ、世界の中心は一つではない。むしろ中心があるとしても、それは極めて夥しい。相対的な中心は夥しく存在するが、排他的な唯一の中心は一つもない。そういう世界の内実を彼らは知った。世界の様相が変わりつつある中で、キリスト教の布教だけが排他的に真理であり続けることはむしろ不可能であろう。

さて、今日既成宗教集団の退潮という主潮流のなかで、新新宗教の活動が依然活発である。かつて、世界統一神霊協会やオウム真理教がおそらく青年層の加入という点でも、社会との軋轢の大きさという点でも、際立っていた。しかし、何れも現代社会の中で青年層が置かれた状況を巧みに捉えた方法で加入者数の増大に成功していたように思われる。しばしば言われるように現代の青年は、表面的な交わりに終始し、深い次元で他者と交わらない。傷つくことを予め拒否する姿勢が習慣化しているように思われる。資本主義的な社会体制の中で、彼らは無意識的には他者との深い交わりを希求しつつ、功利的で表面的な人間関係のネットワークに絡めとられている。そこから脱出しない限り、人間を深いところから揺さぶる体験には出会えない。本来的な脱出は、他者と真正面から向き合い、お互いに自己を存分に主張し合いながら他者と共

生して行く道、その意味では全く新しい道へと一步を踏み出すことによって始まるが、しかし、この新しい道は目に見える形では何ら新しくない。

問題は自分が内部から変わる事なのだが、青年の中には、しばしば自分の内部はそのままに、まるで転校したり転職したりするように新新宗教に加入する者もいる。彼らが加入する組織の構造は、現代日本社会の言わば縮図である。それは、一人ひとりが創造的に生きる共同体とは対極にある。オウム真理教が典型を示していたように思うが、それは正に日本社会の戯画化そのものである。現実の社会にある欺瞞はそこでははるかに少ない。例えば、職業選択の自由といっても、それは当然のことながら自己の能力やコネなどとの相関なしにはあり得ないし、そうなれば、幼稚園以来の熾烈な偏差値教育を、無理を承知で勝ち抜かねばならない。しかし、ほぼ全員がこの戦いに参入するわけだから、個人個人にとっては論理的に見ても極めて空しい戦いであるのは明らかだ。職業選択の自由は当然ながら極めて限られざるを得ないのだ。社会にあってこの種の欺瞞はある程度必要悪なのだが、青年は欺瞞を好まない。

本来的自由には、自分が所属する自由社会では手が届かないと気づいた一部の青年は、学校という管理社会で慣れ親しんだ同じ指示体系に支配された擬似社会に進んで加入することになる。この場合、しばしば自由度や創造性の余地は少なければ少ないほど、彼らにとって居心地がよい。彼らが加入するのは社会の縮図としての擬似社会であるから、それなりの昇進も用意されている。規模が小さければ小さいほど、構成員の達成感も高いのは理の当然である。これは何も宗教集団だけの特殊事情ではない。

ところで、新新宗教だけではなく既成宗教集団も社会の縮図あるいは擬似社会という点では何ら変わるところはない。何がそれらを分けるかと言え、一つには社会との軋轢の度合いということになる。これは、しかし、直ちに気づかれるようにあくまで相対的な尺度である。それでも、集団結婚式とか地下鉄サリン事件ということになれば、結婚に関する社会通念とは相容れなかったり、社会破壊的な組織行動であったり、何れも常識の埒外にあるのは明瞭である。

しかし、今日われわれが抱えている問題の難しい点は、ボーダレスな社会と言われるように、むしろ境界領域の拡大とでも言うべき事態と関わっている。様々な領域で正常と異常との境界が曖昧になっているのが現代の一つの大きな特徴である。

## 5. 現代社会のなかで

もちろん本来曖昧であったものがかつては暴力的に区分していた、と言ったほうが実態に即しているかもしれないが、しかし、現実には規範が流動化しているし、ボーダレスという特徴が社会に充満している。

われわれの社会は近代科学的価値観と資本主義的・自由主義的価値観を自明のもの

としてきた。その最先端にわれわれは現在生活している。近代科学も資本主義も自由主義も実は極めてヨーロッパ的な価値を体現したものである。そして、それは特殊よりも普遍を志向する。いや、むしろ嗜好すると言った方が正しいかもしれない。何れにせよ、ヨーロッパで成長してきたキリスト教は時にはそれらと共存しつつ、時には自ら尖兵となってそれらを世界に普及してきた。最先端にあってわれわれが目にしてるのは、今や環境汚染であり、自然破壊であり、臓器移植、脳死問題、遺伝子治療、クローン、ヴァーチャルリアリティ、インターネット、等々である。これらは決して特殊日本的な問題ではない。

環境汚染、自然破壊が克服されるべき課題である一方、そのように汚染された環境や破壊された自然は、同時にわれわれが受け容れるべき所与の生きる場でもある。上に掲げたその他のものも、われわれがそこで生きる環境の構成要因に既になりつつある。われわれは残念ながら伝統社会に戻ることは出来ない。かつては個性豊かな地域社会が各地に根付いていた日本も、画一化・均質化してしまっている。日本中の都市の郊外に展開する均質化した景観は、そのままわれわれ自身の心象風景に他ならない。

たしかに、科学技術や医療技術は飛躍的な発展を遂げた。日常生活はますます便利になったし、平均寿命も延びた。病気が治る確率も高まった。しかし、何故か個人的な生活実感としては、生はかつてなかったほど<矮小化>しているのではないだろうか。逆説的だが、臓器移植技術の発展が生から尊厳を奪いつつあるように思う。生の一回性という事態は今どのように理解されるのだろうか。われわれはみな、単なる機械の部品、交換可能な部品の集積に過ぎないのか。わたしがわたしである、とは一体どのような事態なのか。科学技術の発展とともに、われわれは今後ますますアイデンティティの危機と格闘せざるを得なくなるであろう。

さらに、われわれは日常生活における価値尺度の流動化・曖昧化にも直面している。例えば、日本において本来の意味での個人主義は根付いていない。個人主義という言葉でわれわれが暗に指しているのは、利己主義に過ぎない場合があまりに多い。自己中心主義と言い換えてもいいが、これは自民族中心主義とも通底している。

個人のメンタリティの自己中心主義化とも連動するが、正しいかどうか、よりも自分にとって快いか不快か、つまり快・不快原則が行動規範になっている。これはもちろん原初的行動規範ではあろうが、通常大人になって社会化すれば、善・悪の原則と快・不快原則とが自己の内部でせめぎ合っても、最終的には前者が後者を凌駕するはずなのであるが、現実にはそうはならない。モラトリアム期の無期限延長とでも呼ぶべき事態が、日本社会の中で定着しつつあるようなのである。われわれは成熟を拒否した社会に生きているのである。あえて戯画化して言えば、成熟を拒否し、快・不快原則のままに自己中心的にヴァーチャルリアリティの世界で自己閉塞的に生き続ける大人になりきれない人々の群れ。成熟が大人の刻印でない社会では、無垢が子供の刻印になることもない。



## 6. 現代日本社会とキリスト教文化

現代社会について、わたし自身書き足りないことが山ほどある。例えば、学級崩壊や学校崩壊、少年による猟奇殺人。援助交際という言葉など今や廃れてしまった感がある。数え上げれば切りがない。キリスト教の信徒たちも、これらの何れとも完全に無縁ではありえない。しかし、ここではその点を指摘するにとどめておきたい。

むしろ、今まで一度もインカルチュレーションを達成できずに来た日本のキリスト教にどのような可能性が残されているのか、という刺激的なテーマをめぐって考えてみたい。もちろん、全国規模の NICE<sup>14</sup>もその可能性の模索ではあった。札幌教区で言えば宣教司牧評議会の設立も然り。しかし、それはそうなのだけれど……、という気分が多く信徒によって共有されているように思う。

既に、わたしは「1. キリスト教と〈名誉白人〉」の冒頭で、「キリスト教はなぜ日本の文化の内部で開花できないのか？」と問いかけ、すぐに「おそらく、それは異物に留まっているからである」と答えておいた。これはわたしの本音である。NICE の運動が全国的な展開を見せているとき、わたしも初めて〈分かち合い〉に加わった。まず感じたのは「これは encounter group ではないか？」というものだった。基礎共同体 (basic community) という考え方についても、文化背景／文化土壌が全く異なった場で開花し得るかどうか、という基本的問題に気づかなければならない。

もちろん、これらについては緒に着いたばかりだから長い目で見守る必要があるだろう。なぜなら、われわれがヨーロッパ・キリスト教から学び得る重要な点の一つは、time span の長さだからである。われわれは、しばしば「目の黒いうちに」と言う。自分が生きて元気なうちに成果を見たい。この言葉にはそういう心情が表れている。言ってみれば、ヨーロッパで成長してきたキリスト教は何代「目が白くなろうと」将来に希望を託すのである。そして、この希望こそがキリスト教の推進力・駆動力になってきたし、存在理由でもある。結果として日本社会を豊かにする方向でキリスト教にはどんな貢献が可能かと考えたとき、time span の長さとそれによって生み出される希望を持続的に発信する営みが重要であることに気づくだろう。

かつて救いを排他的に占有する宗教を標榜していたキリスト教も、他の諸宗教と並んで相対的な真理性・普遍性を主張する立場を受け容れざるを得なくなっている。したがって、日本人にとっては、キリスト教も宗教としての多様な選択肢の一つに過ぎないのだが、その事実の中で問われるべきは、なおかつ極めて魅力的な選択肢であることがどのように可能か、という問いであろう。当たり前のことをまずは押さえておきたい。信徒を離れて教会はない、信徒を離れてキリスト教はない。これは何を意味するか。教会に対する要求はそのまま自己に対する要求でもあり、キリスト教に対する要求も同じだということ。教会批判もキリスト教批判もそのまま自己批判に繋がるということ。しかも、だからこそ、あえて行なわなければならないということである。

これは、歴史を引き受ける姿勢を示し続けること、あるいは接木される側の自己認識の継続的な刷新とも連動する。

やはり、ここでパウロの言葉を引用しないわけにはいかないだろう。「あなたがたはキリストの体であり、また、一人ひとりはその部分です」(1コリント 12章 27節)。この「あなたがた」は教会と置き換えてもいい。この手紙の12章 12節以下でパウロは体とその多くの部分に喩えて、教会と一人ひとりの信徒の関係を語る。その中で出るのが先の言葉である。この件を読むといつもわたしは想像の翼に身を委ねる、いや、むしろ、この件自体がわたしを想像の翼に乗せると言った方がいいかもしれない。キリストの復活した体は、われわれ自身である。われわれは一人ひとりと言わば一つ一つの細胞となってキリストの体を構成している。だとすれば、われわれは洗礼によってキリストの体にも接木されているのだ。そして、このキリストの体は初代教会以来のキリスト者たちすべての歴史をも包含している。いずれにしても、それは常にヴィジュアルなイメージとしてわたしの前に立ち現れる。極めて陳腐なのだが、宇宙空間にぽっかりと浮かぶ地球が薄く柔らかいヒトデのように見えるキリストの体によって包まれていくのである。

わたし自身のイメージはともかく、信徒一人ひとりと教会との関係が実はわたしとキリストの体との関係でもあるのだ、というキリスト者としての自覚の在りようは、キリスト教の域外でも十分普遍的意義を持ち得るように思う。例えば、個人と共同体との関係、個人と国家との関係、個人と民族集団との関係、個人と世界との関係をどのように捉え、個人をその中にどのように位置付けるか、という問題に一つのモデルを提供し得るように思うのである。それは、同時に自分が傷つくことを拒否し表面的な関わりに終始するわれわれ現代日本人が本来的な人間の生へと招かれるという体験にも繋がって行くだろう。

もしかすると、<キリストの体>というのはわたしの予想以上に普遍的なイメージになり得るかもしれない。例えば、21節は、同じ体であれば、他の部分に向かって「お前は要らない」、「お前たちは要らない」とは言えないと記し、26節は、「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しむ」と、記す。語られているのは、そもそも排除などあり得ず、共苦が言わば自然的帰結なのだ、というメッセージである。ここに当為はない。自然的帰結として排除は生じ得ず、正にそのようにして共苦のみが生じ得るのである。生きるということはそもそもこういう事態なのだ。そして、それを示し得るのは他ならぬ生きることそれ自体である<sup>15</sup>。

自己閉塞性から解き放たれて、他者を排除せず、自然的な共苦の生に身を委ねるとき、<わたし>は世界のあらゆる他者と、世界のあらゆる生き物たちと、そして世界のあらゆる事物や現象や膨大な問題群と連動していることを改めて発見するだろう。これは、今日の日本の文化にとっても重要な貢献になるに違いない。

## 7. インカルチュレーションの可能性

現代日本社会は様々な問題を抱えている。宗教集団が社会の縮図であるという点では、キリスト教も、その中のカトリックも例外ではない。それは、社会と同じ問題を教会も抱えている、ということの意味する。しかし、困難ばかりではない。希望もおそらくここにこそある。そして、文化内開花の可能性もここにこそ開かれるだろう。

現代は、多様化の時代である。青年であれば誰でもオウム真理教に関心を持つわけではないし、世界統一神霊協会に絡めとられるわけでもない。あえて誇張して表現すれば、自己閉塞的な個人が社会の中に並存する、というのが現代日本社会の特徴のような気がする。共存という言葉を使わなかったのは、積極的な関係性を示唆したくなかったからである。現実はそのような方向性を強めているように思う。しかし、そういう現実の中で、社会の縮図とはいえ社会とは別の枠組みの中に自覚的に身を置いているということの意味は、わたし個人にとっても社会にとっても、決して小さくないはずである。並存しかあり得ないかに見える社会の中で、共存の可能性を示し続けること。もちろん、これが即インカルチュレーションを生むわけではないが、基盤ではある。

ところで、歴史上キリスト教がインカルチュレーションしているように見える地域の多くは、ヨーロッパ諸国による植民地支配と関係があるように思う。その場合には外来のキリスト教が土着の文化の内部で開花したのではなく、文化自体が移入されたと言ったほうが正しい。もちろん、土着文化全体がヨーロッパ文化に取って代わられたわけではないにしても、ヨーロッパ文化の影響下で土着文化は変容せざるを得なかった。植民地化を経験した土地の住民は、いわば改宗を強制された。キリスト教も何がしかの変容を免れないが、住民の大部分が信徒だという点で、文化と宗教は一体化し得る。

翻ってわが国はどうか。既に触れたように、最初のキリスト教伝来とわれわれとの間には断絶がある。あるいは、オラシヨの伝承で知られる隠れキリシタンの文化が日本におけるキリスト教のインカルチュレーションの稀有な、そして特殊な例かもしれない。

ヨーロッパ中世においてグレゴリオ聖歌が長い時間をかけて花開いたことを考えれば、現在日本で進行中の新しい典礼聖歌の試みは、インカルチュレーションの一つの道筋であろう。望ましい姿は、新しく作られた典礼聖歌の豊富な選択肢の中から、ミサを含めた信徒の様々な実践というフィルターを通してわれわれの文化に定着し得る典礼聖歌が生き残っていく、というものだろう。その意味では、聖歌は各地でもっともっと新たに作曲されるべきなのである。

次に考えられることは、特殊ヨーロッパ的ではないキリスト教の探求の必要性である。今日のキリスト教にとってヨーロッパの果たしてきた役割は途轍もなく大きい。

それは事実である。しかし、解放の神学<sup>16</sup>や民衆神学などヨーロッパの外の神学的営みが力強い息吹をキリスト教に吹き込んでいる。もちろん、わが国のキリスト教もその一翼を担っているのであるが、わたしが先に「キリスト教の探求」と言ったのは、時に発表される優れた神学的業績も決して信徒の日常生活と無縁ではなく、むしろその中からこそ生み出されることを示唆したかったからである。

信徒一人ひとりがどれだけ真摯に、日常的な問題と正面から向き合っているか。例えば、オウム真理教は、われわれ自身が今まで直視することを拒んできた鏡に映った自画像であり、いわば現代日本を象徴する組織だと思う。現代日本のキリスト者としてオウム真理教は、他山の石ではなく、自分の問題なのである。インカルチュレーションの可能性はここからも開けるだろう。

そこで気づかされるのは、実は教会自体が組織として内部閉塞的ではないか、ということである。要するに内向きなのである。〈開かれた教会〉が立派なスローガンになり得るのは、開かれていないからこそである。〈共同体づくり〉が叫ばれるのは、共同体になっていない、という自意識の吐露に他ならない。その意味でも、日本の教会は現代日本社会の縮図そのものである。しかし、それは同時に社会との接点でもある。ここでも重要なのは、信徒個人個人の日常的活動以外にないだろう。信徒が一キリスト者として社会で活動する。これはある面では既に行われていることである。しかし、重要なのは一キリスト者＝キリストの体の肢体という点が自覚されているかどうかだろう。わたしは、ここが分かれ目のように思う。そして、少なくとも言えることは、日本の文化が活性化されることなくして、キリスト教だけがインカルチュレーションを遂げることはないだろう、ということである。それは、キリスト教がキリスト教としての独自性を保ちつつ、日本の文化になるということでもある。それはちょうど、ある臓器が臓器としての独自性を保ちつつ、同時に体であるようなものである。この比喻をそのまま続ければ、現在の日本のキリスト教はまだ移植されたままの状態の臓器に近い。

当然のことながら、一人ひとりが自己の日常性に徹し、そこから丹念に共同体の枠組みを広げていくこと。それは、当たり前のことを当たり前のこととして受け容れることに繋がっている。日本人であることを歴史的事実の総体として受け容れ、アジア人であるということも同様の仕方で受け容れ、そのようにして初めて、ヨーロッパとの関係も世界における自分の位置も確認し得るのだが、われわれは幻想のヨーロッパ・キリスト教に自らを接木してしまっただけではないだろうか。

いずれにしても、接木した後は自ら生み出す道が前方に続くだけである。インカルチュレーションは別言すれば、創造の道である。あくまでもわれわれは日本に帰属する者として、日常性に徹しつつ他者との共生の道を探る。なぜなら、わたしの生を支えるのは常に他者の生だからである。そして、この共生の中からのみ文化は生み出される。つまり、他者との共生のネットワークの中で、日常的な文化創出の一翼を担う

こと。おそらく、気が遠くなるくらい息の長い話なのだが、この共生のネットワークを構成する無数の個人の中に点々とキリスト者がいて、それら無数の個々人の活動がネットワークを動かしている。わたしが思い描くのはそういうイメージである。

ザビエル以来 450 年でこの体たらくなのだから、ことは、今後 400 年後に日本のキリスト教がインカルチュレーションを遂げているように、われわれ日本のキリスト者が長い **time span** を持って歩むことができるかどうかにかかっているようにも思うのだが、これは皮肉か冗談にしか受け止められないかもしれない。

## 8. おわりに

実は、ここまで書きながらわたしの脳裏に去来する思いを払拭できずにいる。それは、果たして日本のキリスト者はインカルチュレーションを目指しているのだろうか、という素朴であるが同時に恐ろしい問いである。日曜ごとに教会に通っていると、この問いは結構現実味を帯びて迫ってくる。振り出しに戻るが、それは<名誉白人>という不名誉な呼称を自分の中でどう処理するか、という問題とも関わるはずである。そして、日本人にとってキリスト教とは何か、といういわば客観的な問いではなく、自分にとってキリスト教とは何かという問いをまずは問わなくてはならないだろう。残念ながら、この問いに対する満足のいく答えをわたし自身見出していない。

多分、他者との共生の中で問い続けるしか道はないだろう。いかなる他者も自分と無関係に生きてはいない。このことを「キリストの体」というパウロの共同体の隠喩が示している限り、そして人間の尊厳が無視される今のような状況の中でわれわれがキリスト者として生き続けざるを得ない限り、この国でキリスト者であることの意味は小さくないと思う。

考えてみると、文化というものは結果としてそこに現出するものであって、最初から創り出そうとして創り出されるものではない。むかし、公共施設などの名前についている<文化>に胡散臭さと居心地の悪さを感じたのは、人々の日常的な営みの果てにしか文化は生み出されないことを誰もが無意識的に感づいていたからである。わが国におけるキリスト教文化も例外ではない。われわれが生きているこの土地の文化の創出にキリスト教がいかに関わるかが問われているのであり、同時にそれは、インカルチュレーションの問題とも通底するのである。

## 注

- 1 通常、文化内開花と訳される。土着化といった方が身近な感じかもしれない。本文では、以後片仮名で「インカルチュレーション」と表記。
- 2 もちろん、有島武郎、有吉佐和子、市川房江、井上ひさし、岩下壮一、植村正久、内村鑑三、遠藤周作、大塚久雄、小川国夫、加賀乙彦、賀川豊彦、神谷美恵子、椎名鱗三、島尾敏雄、島崎藤村、津田梅子、徳富蘇峰、徳富蘆花、南原繁、新島襄、新渡戸稲造、三浦綾子、森有正、八木重吉、矢内原忠雄、与謝野晶子、吉野作造などの活動を忘れるわけにはいかないが。
- 3 取り敢えず、次のサイト情報、参照。`名誉白人` (<平和と人権の実現を願って>「声」(『時評』1986年3月)、[http://www.ne.jp/asahi/uzo/uzo/serita/jihyo/koe/koe\\_1986\\_03.htm](http://www.ne.jp/asahi/uzo/uzo/serita/jihyo/koe/koe_1986_03.htm))、「名誉白人は名誉か 黄色くていいじゃないか」(『高山正之の異見自在』[1999年06月19日]東京夕刊、<http://kaz1910032-hp.hp.infoseek.co.jp/110619.html>)、「アイ・アム・ノット・チャイニーズ」(『萬晩報』=伴 武澄主宰、2005年08月17日(水)、<http://www.yorozubp.com/0508/050817.htm>)、「アフリカの果てに散った企業戦士(2) 言えなかった I am not a Chinese」(1999.10.25 Mikiko Ban, Mikiko Talks on Malaysia、<http://homepage3.nifty.com/kiara/mikiko/991025.htm>)、「『遠い夜明け CRY FREEDOM』(『歴史映画の部屋』、サイト『やっぴらんど』、[http://www.actv.ne.jp/~yappi/eiga/EE-09cry\\_freedom.htm](http://www.actv.ne.jp/~yappi/eiga/EE-09cry_freedom.htm))。
- 4 「接木」の比喩はパウロが使うものである。ローマ11:17~24参照。
- 5 かつては専らホロコーストと呼ばれていたが、それが元来「焼き尽くす献げ物」を意味するギリシア語に由来することから、ユダヤ人はショアー(ヘブライ語で「絶滅」を表す)を用いる。クロード・ランズマンの『ショアー』以後、ショアーという用語も一般に用いられるようになった。
- 6 パウロ神学的に理解すれば、イエスの贖いの死をとおして神は罪の支配下にあった人類を救い出したのであり、イエスの死をそのようなものとして受容することによって、われわれは現実的に救いを体験するのだが、それにも拘わらず、そのような信仰に支えられて為された歴史的な行為の堆積は、決して消え去ることなくわたしの前にある。
- 7 これは、むしろ歴史の必然である。ヨーロッパがキリスト教を育んだというよりは、キリスト教がヨーロッパを生んだのである。
- 8 すべての種に属する固体はいずれも、この今という時をそれぞれの種の進化の最先端で生きている。
- 9 アレクサンドル・イサエヴィッチ・ソルジェニーツィン。1918年12月11日生まれのアラスカの作家。伝記的情報については、次のサイト情報を参照。「ソルジェニーツィン」(『ロシア文学』、<http://www.geocities.co.jp/Bookend-Ango/7795/pis20/solzhenitsyn/solzhenitsyn.html>)。わたしが最初に読んだのは、『イワン・デニスオヴィッチの一日』『マトリョーナの家』だった。河出書房のグリーン版世界文学全集の1冊で、イリヤ・エレンブルグの『雪解け』と抱き合わせだった。1970年にノーベル文学賞受賞。70年代は、わが国に怒涛のようにソルジェニーツィンが紹介された時期だった。『癌病棟』、『煉獄のなかで』、『収容所群島』、『1914年8月』など、代表作が立て続けに出版された。
- 10 周知のとおり、カトリックの語源はギリシア語の *katholikos*、つまり「普遍的」である。
- 11 間瀬啓允訳、岩波書店、1986年。他に例えば、(間瀬啓允訳)『宗教の哲学』、培風館、1968年、(間瀬啓允/渡部信訳)『もうひとつのキリスト教—多元主義的宗教理解—』、日本基督教団出版局、1989年、(間瀬啓允訳)『宗教がつくる虹—宗教多元主義と現代—』、岩波書店、1997年、(間瀬啓允/本田峰子訳)『宗教多元主義への道—メタファーとして読む神の受肉—』、玉川大学出版部、1999年。
- 12 ハーヴェー・コックス(塩月賢太郎訳)『世俗都市—神学的展望における世俗化と都市化—』、新教出版社、1967年、同(大島かおり訳)『世俗都市の宗教』、新教出版社、1986年、トーマス・ルックマン(赤池憲昭/ヤン・スィンゲドー訳)『見えない宗教—現代宗教社会学入門—』、ヨルダン社、1976年、同(星川啓慈/山中弘訳)『現象学と宗教社会学—続・見えない宗教—』、ヨルダン社、

---

1989年、ブライアン・ウィルソン（井門富士夫／中野毅訳）『現代宗教の変容』、ヨルダン社、1979年、佐藤敏夫『宗教の喪失と回復—運命としての世俗化とキリスト教—』、日本基督教団出版局、1978年、等、参照。

- 13 代表例として、文化人類学者C・レヴィ＝ストロースと作家J・M・G・ル・クレジオの名を上げておこう。
- 14 福音宣教推進全国会議（National Incentive Convention for Evangelization）の通称「ナイス」。日本のカトリック教会が第二ヴァチカン公会議の精神を定着させるために二度にわたって全国規模で開いた会議。第1回は1987年11月20～23日、京都において開催（テーマは「開かれた教会」）。第2回は1993年10月21～24日、長崎において開催（テーマは「家庭の現実から福音宣教のあり方を探る」）。
- 15 以上、本節後半部の三つのパラグラフで書いていることを基にして、以前わたしは別稿としてまとめたことがある。以下を参照。阿部 包「共生と共同体をもとめて—イエスとパウロの言葉から—」、藤女子大学人間生活学研究会編『マトリクス人間生活学』、溪水社、2002年、105～125頁、同「家族概念の拡大と共生の視点—イエスのメッセージから—」、『人間生活学研究』第8号、1～8頁、同「『体』の隠喩と共生の視点—パウロのメッセージから—」、『人間生活学研究』第9号、13～24頁。
- 16 取り敢えず、グスタヴォ・グティエレス、エルネスト・カルデナルの著作参照。前者については、（関望／山田経三訳）『解放の神学』（岩波現代選書）、岩波書店、1985年、（大倉一郎／林巖雄訳）『いのちの神』、新教出版社、2000年、（林巖雄訳）『み言葉のわかちあい』日本キリスト教団出版局、2003年、（林巖雄訳）『み国のわかちあい』、日本キリスト教団出版局、2004年、参照。後者については、（伊藤紀久代訳）『愛とパンと自由を—ソレンチナーメの農民による福音書—』、新教出版社、1982年、（北條元子訳）『正義と愛の御国を—ソレンチナーメの農民による福音書 II—』、新教出版社、1989年、参照。

※ 日本のカトリック教会の公式情報については、次のカトリック司教協議会のホームページ、参照。  
<http://www.cbci.catholic.jp/jpn/index.htm>

※ 追記：本稿の本文は、既に2000年春にほぼ書き上げられていたが、公表せずに来た。議論を再度組み立て直す必要性を感じていたこと、具体的な提案をしていないこと等が、その主な理由であったが、今回読み直してみても、筆者の基本的なスタンスはほとんど変わっていないので、若干の修正を施して公表しておくことにした。（2006. 3. 31）